

平成27年度 病害虫防除技術情報 第5号

平成27年7月1日

大分県農林水産研究指導センター

農業研究部

梅雨期における施設野菜の灰色かび病、白ネギのべと病 及びトマトのすすかび病対策について

本年度は、6月2日の梅雨入り以降、平年に比べ降水量が多く、日照時間も少なくなっています。そのため、施設栽培の果菜類では灰色かび病の発生が、白ネギではべと病の発生が認められています。夏秋トマトでは、すすかび病の発生が平年より早く認められています。向こう1か月の天候は平年に比べ、気温が低く曇雨天、降水量が多いと予想されており、今後の気象条件によっては被害の拡大が心配されます。灰色かび病、べと病及びすすかび病の発生に注意し、速やかな防除に努めましょう。

1 主な被害作物

- 1) 灰色かび病 夏秋トマト、ピーマン
- 2) べと病 白ネギ
- 3) すすかび病 夏秋トマト

2 発生条件

1) 灰色かび病

灰色かび病の発生好適条件は、20℃前後の気温と多湿である。このため、夏秋栽培における果菜類では、梅雨時期の曇雨天により発病が助長される。

2) べと病

べと病の発生好適条件は、15～20℃程度の気温と連続した降雨である。このため、白ネギでは、梅雨時期の低温かつ長期の曇雨天や圃場の排水不良、高湿度により発病が助長される。

3) すすかび病

すすかび病の発生好適条件は、26℃前後の気温と多湿であるが、孢子形成適温は18～22℃程度である。このため夏秋トマトでは梅雨時期の低温かつ曇雨天により感染が助長される。

3 防除の考え方

- 1) 施設栽培においては、発病果や発病葉は伝染源となるので、見つけ次第ハウス外に持ち出し、土中に深く埋める等の処分を行う。
- 2) 果菜類では、適切な肥培管理で植物体が過繁茂にならないようにする。また、適度な整枝や葉かきを行い、通気をよくするとともに殺菌剤がかかりやすくする。
- 3) 灰色かび病は、現在発生盛期であることから、治療効果のある薬剤を散布した後、予防剤を中心としたローテーション散布へと移行するのが効果的である。
- 4) ベと病及びすすかび病は、発生が見られない圃場も既に病原菌が感染している可能性が高いため、まずは治療効果の高い薬剤を散布した後、予防剤（保護殺菌剤）を中心とした、系統の異なる薬剤によるローテーション散布へと移行するのが効果的である。
- 5) 白ネギは薬剤が付着しにくいので、必ず展着剤を使用し、株元にも十分付着するよう散布する。
- 6) 防除薬剤は、大分県農林水産研究指導センターホームページ内にある「大分県主要農作物病害虫及び雑草防除指導指針」（<http://www.jppn.ne.jp/oita/>）を参照する。なお、薬剤によっては、指針の更新日以降に登録内容が変更されている場合があるため、薬剤のラベルに従って使用すること。

4 防除上注意すべき事項

- 1) 農薬使用基準（使用時期、使用回数等）を遵守し使用する。特に、混合剤の場合、異なる商品名で同一の薬剤成分が含まれる場合があるため、「成分総使用回数」を十分確認した上で使用する。
- 2) 薬剤によっては、高温時に薬害を生じやすいものがあるため、散布時間や天候、使用する展着剤の種類等に十分注意した上で散布を行う。